

文樂評切拔帳 (一月)

文樂の晝夜制

山口 廣 一

新しい観客が激増しつつある文樂に、近ごろは若い學生諸君の見學が次第に目立つやうになつて來た、それに舞台でもこの春から懸案の晝夜二部制が實行に移された結果、若い太夫の活躍する分野が擴大されて來た、この緊迫の時局下にこの文樂の若返つた充實ぶりには有難くもめでたい。

しかし、昨年末の本欄でも少し觸れておいた通り、折角の晝夜制によつて上演時間の延長を獲得しながら依然として今度の「忠臣藏」が大序を省略したり或は七段目が僅か四十五分に短縮してゐるやうな苦々しい態度は今日の時局に照應して誰よりも先づ肝心の文樂自体において、もつと自責の念を持つべきではあるまいか。

さて、大序を抜かした今度の「忠臣藏」では三段目の「喧嘩場」からだが、この三段目

では人形における門造の師直と紋十郎の判官がともに秀れてゐる。次の住太夫の「判官切腹」は巧妙な語り口ながら重量感に乏しく、「静々と昇きあぐれば」あたりに悲痛味が添はない。七五三太夫の「ニツ玉」はまづ藝質の一致があるとして「勘平切腹」の重太夫は甚だ低調、なほ最後の七段目では歸還勇士の濱太夫が大役の平右衛門を語つてゐるが、まだ若き一杯の藝とはいへ、この人の素質のよきは將來を期待させるものがある(毎日新聞)

忠臣藏と寺子屋

茶谷 半次郎

晝の部 判官切腹、住太夫車輪の床より聴く、この太夫老巧、歌舞伎の友右衛門に似てなんでもこなす、がなんでも向くといふわけでないやうだ。九太夫、藥師寺に濃刺の生氣あり。紋司の力彌の人形に、びりびり神経の通ふてゐるに好感がもてる。二つ玉、七五三

太夫の定九郎は商切れよく、小氣味よく勘平の人形の着付の色合赤心を惹く。もちろん玉助もわるくなく身賣りの文太夫は穩健、政龜の才兵衛の歩き振りに感心、勘平切腹の重太夫にただ手堅しといひつべし。廣助の「お師匠はんお師匠はん」の掛聲獨占。

茶屋場では呂太夫の詞遣ひだいぶん明哲になつたは同慶。伊達太夫も簡明、餘程細かくなつて造境を示す。あたふ素材の持ち腐れにならぬことを切望する。紋十郎の若輕は梯子に乗りしな氣抜けする、今一工夫あるべし。忠臣藏を晝の部に壓縮は看板の字つらもせこましく、刈込まづに晝夜通しで出し、切に吉川屋でも持つてゆくべきであつた。

夜の部 新作小銀治は人形に感嘆し三味線を奏める囁きのみ耳邊にしきり、この種の作がさう出来てゐる限り太夫が聲量に恵まれてゐねば閑却されるに無理はない。道八の三味線の呼吸は流石と思はせる「吉川屋」の綾太夫の伊左衛門はやゝ重たく、この太夫年々に貫祿を加ふるは定評の通りなれど、半面に輕味柔味を求めたいと思ふ。吉川屋は悴ごとなり、南部太夫の夕霧へ可愛男に逢坂の以下愉しく聴いた。駒太夫なきあと情感に浸つたメ

ロデイを只この太夫に聴く。

「寺子屋」の古靱太夫床に平伏する容だけで既に場を壓す。輪廓の大きな周囲とかなり聞きあり。不相變語り口慎重を極む。今月は「鳴戸」の時の如く出し物に論議はあるまい。それも要は演ずる心構へひとつ。紋下の語つてならぬものありと聞かぬ。「吃文」の大隅太夫らりるるありやの吃りの癒つた嬉しさの感激稀薄。なき津太夫が偲ばれる。たゞ清二郎の張り切つた三味線により熱情の響きが聴かれた、榮三、文五郎を惜しんで使ふは賛成である。(讀賣雜誌)

文樂(夜)の寺子屋

「寺子屋」は切を古靱が語るが重厚な語り出して感情について行け、次第にそれが高潮し、その極限においてぶいと突き離される、これは最高潮の一步手前で古靱の冷やかな理智が露出する故で、古靱に對する不満はいつもこの物足らなさである、悲哀感の深いところでは、思ひ切り泣かされたい、古靱の文章を明解にといふ語り口がかうした結果を招來するのではないか、紋下は明瞭に語るべしとはかうした文章の明瞭さのみではない。清六

の糸は珍らしく冴えない、結局榮三、文五郎の人形の「寺子屋」になつた

文樂は人形本位か、義太夫本位か今日は人形本位に墮してゐるが文樂はあくまで義太夫本位でなければならぬ、人形の文樂になることは太夫の不名譽である、オール太夫の奮起を望みたい。(大阪新聞)

文樂の寺子屋

初春から文樂座も晝夜二部制となつて晝は若手中心の「忠臣蔵」を通し、首腦連は夜を受持つが、前後の「寺子屋」と「吃文」を矯折つて「寺子屋」に時間を割き「寺子屋」は寺入りもつて古靱が源藏戻りから入念に語る。吉右衛門の源藏で見ると、つい源藏が主役になるが、榮三の松王が舞台一杯に擴がつて、いかにもこの狂言の正しい演出を味はふ感じである。古靱は前半を故意に氣を抜いたか、やゝ力弱かつたが、次第に盛上り、龜松榮三郎の源藏夫婦も好演で、松王は首實檢でも歌舞伎のやうな小細工もなく、殊に二度目の出から「いろは送り」が感銘深く、文五郎の千代も派手な動きを押へて、夕霧の濃艶さと對比すべき神妙さを見せた。新作の「小

假治」は先年猿之助の演じた前シテ童子を老翁に變へ榮三は劍の來歴を敘するあたりによい形を見せ後シテには狐らしい振に人形獨特の味を出してゐた。大隅の「吃文」の表現は力演の割に買へない。(「朝日新聞」)

名作同好會第九回

二月十四日淺草雷門並木俱樂部に開催、外題は菅原傳授手習鑑序中より四段目迄、頗る盛會なりき。其の役割左の如し

序中加茂堤	松浦	淀橋	糸	和	孝
二段目杖折檻	久米	中次	糸	和	孝
同 東天紅	淺井	蝶花	糸	勝	助
同相承名殘	平山	平茶	糸	吉	和
三段目車先の段掛合					
時平 雅樂	松王義昌	梅王子太郎	糸	龜造	
櫻丸 中次	松王一司	糸	龜造		
同 茶筌酒	谷口	主華	糸	和	孝
同喧嘩の段	木村	一司	糸	和	孝
同訴訟の段	宮内	ほくろ	糸	團	市
同櫻丸切腹	烏	うつば	糸	龜	造
四段目天拜山	川口	子太郎	糸	和	孝
同 北麓峨	松浦	淀橋	糸	和	孝
同寺入の段	米澤	雅樂	糸	和	孝
同 寺子屋	三並	義昌	糸	猿三郎	
事務所東京芝罘平町三二	川口	子太郎方			